

思い付きネタ集☆

家無しじゃない無銘だ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタが思いついたら書いていますが、続きが思いつきません。誰かこのような設定で書いてくれませんか？

9 / 7 (土)

目次

真・恋姫†無双

浮雲と月

1

守護者最強と三國志最強

6

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

ダンジョンに炎系統の技を使うのは間違っているだろうか (仮題)

10

名探偵コナン

ジンに成り代わったんだが義妹達が可愛くてツライ (仮題)

19

真・恋姫†無双

浮雲と月

満月が綺麗な夜。とある城の縁側に一人の青年が座っていた。

その青年の格好は黒い浴衣で手にはお猪口を持ち、傍には徳利がのせられた盆が置かれていた。

「どうやら、月見酒をしているようだ。」

その様子を少し離れた角に隠れて見ている者がいた。

「…隠れて見ていないで、出てきたらどうだい?」

青年は目線だけをそちらに向け、声を掛ける。

すると、一人の少女がおろおろしながら出てきた。

出てきたのは、空色のような銀髪で和風のメイド服のようなものを着た、優しい雰囲気のある美少女だった。

「…なんだ、君か。どうしたんだい?」

「そ、その、(見惚れていました、なんて言えないよ…)へうへう
…////」

「?」

少女が言い淀み、赤面しているのに青年は首を傾げる。

「…立っていないで、座ったら?」

「い、いいんですか?」

「構わないよ…」

「し、失礼します…////」

少女がお盆を挟み、青年の横に座る。青年はそれを気にせず、お猪口に注いだ酒を呷る。

「……………、君も飲むかい?」

「えっ、その、えうつと……………へうへう…」

「嫌なら別に構わないよ」

「い、いただきます!////」

青年からお猪口を受け取り、酒を注いで貰う。それをチビチビ飲む。その様子を青年は横目で見て、自分も酒を呷る。暫く、それが繰

り返された。

「あ、あの…」

「ん？ なんだい？」

少女は落ち着いたのか、青年に話しかける。青年はそれを視線だけ向ける。

「その、あの、えーっと、月が綺麗ですねっ！」

何を話しているのか分からないのか、わたわたしながら咄嗟に言葉を出す。

その言葉に青年は、無表情だったのを一瞬ポカーンとするが、クスクスと笑い出す。

「ふふっ」

「へう〜……………／／／」

笑われて恥ずかしくなったのか、少女は顔を赤く染めて俯く。

「…笑って悪かったね、〃月〃」

「恭弥〃さんは、いじわるです…／／／」

月と呼ばれた少女に恭弥と呼ばれた青年は手を伸ばし、優しく頭を撫でる。それに月は恥ずかしがるが、拒む様子を見せない。

砂糖を吐きそうな甘い空気が広がる。

暫く撫でていて落ち着いたのを確認すると月から手を離す。する

と、月が小さく名残惜しそうな声を出す。

「どうしたんだい？」

「な、何でもないです！／／／」

「ふん。」

恭弥は、再び空に浮かぶ満月を眺める。それに月が続くように満月を見上げる。

「…綺麗ですね」

「そうだね。」

「私の真名と同じ字ですけど、私には勿体ないくらいです…。」
「そう言い、顔を俯かせる。」

「…そうかい？ 君にぴったりだと思っけど？」
その言葉を恭弥は否定する。

「…えっ？」
月はその言葉に顔を上げて、恭弥を見る。

「…優しく人を照らす月は、君にぴったりだと僕は思うよ」
恭弥は、優しく微笑む。

「…あの、隣に座っても、いいですか？」
「…………別に構わないよ」

恭弥は盆をどけ、間をあける。
そこに月が動き、座り直す。

「…ありがとうございます」
「…何の礼だい？」

「貴方のお蔭で、私達は今を生きていられます」
その礼をするなら僕じゃなく、小動物達にしなよ」

「勿論、ご主人様達にも感謝しています。でも、貴方があの場から私達を連れ出してくれたから今があります」

「…大袈裟だよ。それにあの時は僕の単なる気紛れで助けたに過ぎないよ」

「それでも私は感謝しています」
「…はあ、好きにしなよ」

「はいっ！」

良い笑顔を恭弥に向ける。それにタメ息を吐き、そっぽを向く恭弥。

遠慮がちに月は恭弥の肩に頭を預ける。
暫くの間、このままで良いですか？」

「…別に。好きにしなよ」
「ありがとうございます」

ふわりとした笑顔で、嬉しそうに月がお礼を言い、目を閉じる。
再び甘い空気が広がる。

少し時間が経つと、穏やかな寝息の音がする。

どうやら月が眠ってしまったようだ。

恭弥は、起こさないよう、そつと月の頭を自分の膝に移す。その頭を優しく撫でる。

「…まったく君は。もう少し、欲を言っても良いのにね？」

言葉では呆れているが、その表情は優しくかった。

満月は二人を優しく照らしていた。

後日、とある天の御使いに月が綺麗ですねの意味を教えて貰い、盛大に顔を赤く染めたのは、完全に余談である。

説明

雲雀恭弥

死んだのに赤ちゃんからやり直しになった。自分が雲雀になったことを知ると、ロールプレイの為、身体を鍛えたり、言葉使いを気を付けたりにしていた。現在は素で出来る。並盛町がないと知るが、風紀委員長になったり、風紀財団を設立したりした。

夜の見回りで北郷達が争っている所に遭遇。乱入し、巻き込まれ外史に飛ばされることになる。

気にいった相手には、小動物か真名で呼ぶ。

集団行動が苦手。基本は一人で行動している。

反董卓連合軍では、一人で呂布を相手取った。その呂布から董卓達を助けてほしいと頼まれ、単独で浸入。その際、白い服装の集団と陰湿そうな男が立ち塞がるが、蹴散らし、救出に成功する。

使用武器、トンファー（特注）

董卓（月）

姓、董 名、卓 字、仲穎 真名、月

幸薄そうな少女。悪逆非道の汚名を着せられた可哀想な少女。幼馴染みの軍師と共に雲雀に救出された。

自由になり、現在は色々なことができ、とても幸せ。助けてくれた雲雀に恋心を懐く。

北郷には、感謝をしているが恋心を懐いていない。

守護者最強と三國志最強

とある日、鍛練場で激しく金属音が鳴り響く。

そこには、旧学ランを羽織り腕に腕章をし、トンファーを構える雲雀と、赤い髪のアホ毛が二本ピヨコリと跳ね、手には戟を持った少女がいた。

互いに飛び出し、トンファーと戟がぶつかる。衝撃が周りに伝わり、そこに小さなクレーターができるが二人は気にしない。トンファーによる連撃をいなし、戟による圧倒的な一撃を避ける。互いに攻撃が入らず、膠着状態が続く。

暫く激しい打ち合いを続けていたが、突然互いに止まる。その理由は……、

「………お腹、すいた。」グウウ

少女のお腹の音が鳴ったからだ。

「…ハア。今日はここまでにしようか」

「…ごはん」

「……片付けたら作ってあげるから」

「…うん」

少女は表情が動かないが嬉しそうにアホ毛がピクピク動いていた。

…対照的に雲雀は若干目が死んでいるような気がした。

余談だが、この二人が去った鍛練場の状態は悲惨の一言だった。この状態を見て、ここの主とロリ軍師等が胃を痛めるまで、後少し。

二人は食堂にやって来たが雲雀は厨房へ、少女は席についた。

少女は今か今かとそわそわしていた。その机の前にコトリツと山盛りに料理が盛られた皿が置かれた。

「…先にこれを食べ待ってて」

「…ありがとう」

雲雀は再び厨房に戻り、少女は置かれた料理を黙々と食べる。

普通の人が食べきれない量をその身体の何処に入るのか、凄い勢いで口のなかに消える。

食べきったと同時に新しい皿が置かれる。それに少女は表情は変わらないが、目が輝いているような気がする。

「…『恋』、もう少し味わって食べてくれないかい？」

「？…味わって、食べてるよ？」

「…しつかり噛んで食べなよ」

雲雀はさらに目が死んだようになり、タメ息を吐きながら厨房に戻っていった。

その後ろ姿に恋と呼ばれた少女は、頭に？を浮かべるが食事に戻った。

そこから、恋が食べ終わったと同時に新しい皿が追加され、それを食べ、の繰り返しで恋が満足するまで続いた。

因みに、恋など大食いの者達用に食材が別れて用意されている。

あの後、恋が満足してから雲雀は自分の食事を取り、中庭の縁側に来ていた。

日差しが暖かく昼寝にはちょうどいい気温だった。雲雀は横になり、目を閉じた。模擬戦に調理で疲れていた為、(模擬戦よりも調理に疲れていたような気が…)すぐに寝息が聴こえてきた。

雲雀が目を覚ましたのは夕方だった。

起き上がろうとしたが、右腕と腹の上に重さを感じた為、起き上がるのをやめた。

右腕を見ると、恋が腕に抱きついて気持ち良さそうに眠っていた。腹の上も見ると恋の愛犬のセキトが眠っていた。周りを確認すると恋の家族の動物達に囲まれていた。

どうやら、雲雀が眠っている間に恋と動物達がやって来て一緒に昼寝をしたようだ。

雲雀はまずセキトを左手で軽く揺さぶり起こし、腹の上からどけた。

次に恋を同じように揺さぶる。しかし起きない。さらに揺さぶるが起きない。

雲雀はタメ息を吐き、恋の耳元に顔を近付ける。そして、

「恋、ぐいはんができたぞ」

「……はん」

一瞬で起きる。その反応の速さに呆れる雲雀がいた。

「……はん？」

「起きたかい？ 食堂に行けば食べられるよ。」

「……恭弥は？」

「僕は後で食べるよ。ほら、行きなよ。」

雲雀はそう言っ歩き出そうとするが、袖が引っ張られ止まる。見ると、恋が袖を掴んでいた。

「……恭弥も」

「僕じゃなく小動物とかと食べなよ」

「……恭弥も」

「僕は群れるのが嫌いなんだ」

「……」

一緒に食べようと誘う恋に拒絶する雲雀。そんな、雲雀を上目遣いで見詰める恋。無表情だが悲しそうな雰囲気を出している。

……そんな彼女にいたたまれなくなったのか、雲雀はタメ息を吐き、折れる。

「……わかったよ」

「……行く」

表情ではわからないが雰囲気若干明るくなった気がする。そんな恋に引っ張られ、食堂に向かう。その様子を動物達が見送っていた。

食堂に引っ張られる雲雀に驚く者が大勢いたのは余談である。

……結論、雲雀恭弥（中身別）は女の子（の頼み）に弱い。

説明

雲雀恭弥

唯一、呂布（恋）と一対一で戦える猛者。模擬戦になると膠着状態に陥る。大抵鍛練場がボロボロになる（その為、胃を痛める者が続出

する)。

その後、恋の食事を作る羽目に。料理を頼んでくる恋に疑問を懐いている。料理自体は得意。特に和食。(何故か材料があつた為、久しぶりに作ったところを見られ、たまに作ることに)

昼寝をする和高確率で起きると他の者がいる(大体、恋辺り)。昼寝をするのは、遣ることを終わらせてからにしている。(この辺りは本家よりも常識を弁えている。…それでもブツ飛んでいることに替わりがないが。)

呂布(恋)

姓、呂 名、布 字、奉先

飛將軍と恐れられた元董卓軍の武將。虎牢関で雲雀と一騎討ちをし、敗れる。董卓達や家族(動物達)の保護を求め、濁に降る。

模擬戦では、よく他の武將に挑まれるが自分は雲雀に頼む。自分と渡り合える唯一の者なので加減をしない。と言うか出来ない。(周りの被害が大きくなる原因の1つ)

自分の家族(動物達)がなつく北郷一刀と雲雀を気に入る。料理を食べることが好き。濁に降ってから、特に雲雀の料理を気に入る。

執務が苦手で、陳宮に丸投げ。昼寝など雲雀を見つけると隣で眠る。曰く、ぽかぽかして気持ちがいいとのこと。

原作よりも北郷への依存度が低いが、雲雀にその分、向いている。恋愛感情を持っているかまだ自覚なし。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

ダンジョンに炎系統の技を使うのは間違っているだろうか (仮題)

オッス、オラ………って違うな。どうも、皆〃サン。転生者のジヨット・ボンゴレ です。…まさかのプリーモっすか。そこはツナでしょうよ。と現実逃避。

そして俺は何とダンまちの世界に転生しました！

…と言っても原作あんまり知らないんだけどね。

やく、主人公君やヒロイン達の名前とかはギリギリ知っているけど、ストーリーは全然知らないんだよね、これが。まあ、原作に関わる気はないから別に良いんだけどね？

何故って？簡単な話さ。

こつちにも生活があるんだし？ 主人公とか近づいて、命の危険とかトラブルの元があるのに態々行くこともないだろ？

第一、面倒だし。↑一番の理由

因みに俺の能力だけど、炎系統の技を使えるようにしてほしいって転生させてくれた神様に頼んだんだ。で、死ぬ気の炎(大空、雨、雲、晴、霧、大地、夜)を貰った。属性の理由は便利だから。これに尽きる。あ、リングとか無しで使えるよ。

転生させた神様の爺さんはもつとチートでもいいと言うけど、これでも十分チートだよなあ。

大空は状態異常は効かないし、雨は相手の動きを鈍らせるし、雲は有機物なら増やせる。飛び道具が増やせるのはマジ便利。投げナイフとか補充って金が掛かるから助かる。

晴れは治癒力をあげてくれるし、霧は幻覚を使えるし、大地は重力操作。

夜の炎は空間移動。これは英雄王のカードを使ったアンジェリカの武器を加速させた戦法が使って回避不可の攻撃が出来たりするし、

死ぬ気の炎で出来る応用が多くて便利。

まあ、特典が強力だけど使うのが雑魚じゃ意味ないからメチャクチャ鍛えました。今世は人ではなく普通のエルフに生まれたので長く鍛えられるので頑張りましたよ。取り敢えず始めの100年はみつちり修行した。：変人扱いされたけど。

そこからオラリオにきて、色々とやらかした自覚はしているが何か周りが畏敬の視線を向けてくるのだが、自意識過剰なら恥ずかしい。今の拠点はオラリオの者はおろか天界の神々にも見えないようにしているし入れないようにしている。『爆弾』抱えているようなもんだしね。他の人とかに見つかる訳にはいかないし。霧と大地の炎マジ便利。

あ、特典の他に発展アビリティであの死ぬ気の炎の増幅装置が作れた。なので、拠点のはずつと使っている訳ではないです。ずつとだと死んでしまいます。死ぬ気の炎って生命力だしね。

眷属は俺ともう一人と主神、十数名の『家族』でまあまあ元気に暮らしています。

とある女神 side

彼と出会ったのは偶然。下界に運良く降りられてファミリアを作ろうと思って街を歩いていた。人数は多くなくていい、例え一人でも構わなかった。唯、家族と言うのが欲しかった。

そんな風に歩いていたら、彼がいた。種族がエルフらしく周りの者より顔の造形が整っている。女神である私ですら見惚れるような顔だ。それに雰囲気もまるで絶対の『王』。その言葉が頭を過った。それ程までに覇者としての雰囲気を出していた。

彼を見たとき、私の中で電流が流れたように感じた。彼しかいないと思い、話しかけてファミリアに入らないか誘った。知名度なんてないから断られるかもしれない。けど、彼じゃなきゃ嫌だと思った。

彼から承諾を貰った時、とても嬉しかった。それから彼が泊まっている宿に案内して貰った。正直泊まる場所の宛が無かったので助

かった。早速恩恵を刻む。初めてなので多少戸惑ったが上手く出来たと思う。

でも彼の恩恵を見て驚いた。

ジョット・ボンゴレ レベル2

力：I O 耐久：I O 器用：I O 俊敏：I O 魔力：

I O

耐異状：A 製作：S カリスマ：A

この時点で驚いた。天界である程度下界について調べたが初めからレベル2のポテンシャルを持っているなんて。

それに発展アビリティが耐異状がA？ 高くないかしら？

製作？鍛冶とは違うの？レアなモノとはわかったけど。カリスマ？まあ、雰囲気で解るわね。

さらに驚いたことに魔法とスキルも出ていた。

魔法

炎創造魔法

・炎属性の魔法。術者の想像する形で発動。

詠唱【我は炎を使役する者。炎よ、我に応えよ。】

・武器等に付与可能。

詠唱【炎よ、纏え】

スキル

死炎の守護者

・死ぬ気の炎を使用することが出来る。武器等に付与可能。

・死ぬ気の炎を込めたアイテム製作可能。

・死ぬ気の炎の種類其々の特性を常時発動可能。

・死ぬ気の炎の純度により効果変化。

・生命力の代わりに魔力を消費する。魔力がない場合、生命力を消費することで使用可能。

・覚悟によりステータス上方補正值変化。常時発動。

・守護するものがある時、全ステータス超上昇補正。

・使用可能な属性（大空、雨、晴、雲、霧、大地、夜）

炎炎使いの誇り

- ・炎系統使用時、ステイタス上方補正。
- ・炎系統を使用する英雄^{キャラ}への憧憬により、成長率大アップ。
- 受け継がれし血脈^{ブラッド・オブ・ボンゴレ}
- ・とある王の血^{ボス}を受け継いだ者に与えられる。これは子孫に遺されて行く。
- ・覚醒することにより、常時超直感発動。条件はその者による。
- ・覚悟により全ステイタス超補正。成長率大アップ。

魔法の効果が規格外だ。彼が考えた形で魔法が発動するのだ。どんな形でも変化することが出来ると言うことだ。

スキルも死ぬ気の炎？ 特殊な炎を使用することが出来るみたい。もう1つのスキルも炎系統を使用する彼にはとても大きいものだ。アビリティ補正や成長促進のスキルなどレア過ぎる。

最後のスキルは受け継がれていくもの？それに王って……………。彼って王族なのかしら？

…何か疲れた。でも気になるから彼に聞いてみましょう。

……………そんなことってあるのかしら。嘘を言っていない事は解る。けど、別の世界から転生って。そんなこと出来るなんて、主神クラスの神々にも出来るか。でも、お蔭で彼に会えたし複雑だわ。

しかも、どれも他の神々に知られたら確実に狙われる。隠さない
と。

それから彼と過ごしていった。彼の起こすことに色々驚かされたけど毎日が輝いて楽しめている。彼がダンジョンで“拾ってきた”ってモノに唾然としたわね。今では大切な家族だしね。これから
もどうなるか楽しみだわ。

side out

まだ、主人公君は来ていないみたいだし、原作まで時間があるのかな？

出来るだけ面倒事は避けようとしてんのに向こうからくるんだが、世界は俺に恨みでもあんですかあ？（超絶激怒）

例えばさあ、今現在…、

「あの、アイズ・ヴァレンシユタイン、です。

私に、剣術を教えてください。」

メインヒロイン（幼少期）が目の前にいることとかなあ！

どうしてこうなった!?

アイズ・ヴァレンシユタイン side

彼を知ったのはダンジョンにソロで潜った時だ。何時もより魔物が少ないと思つて下に潜つて行つたら、彼を見つけた。

レイピアとは違った細い剣（確か、刀だっけ？）で魔物を切り裂いていく。時より彼の魔法か、炎を纏つたりしていた。

私のような荒削りじゃない剣術。フィン達に教えてもらっているけど、基礎くらいしか教えてもらえていない。あれを教えて貰えばもっと強くなれると思つた。

その事をリヴァリア達に言つたら、ロキがうるさかった。けど、調べてくれると言つてくれた。

後日、彼のがわかった。

名前はジョット・ボンゴレ。初めからレベルが2で騒がれていたらしい。

ソロで初めは潜っていたらしいけど、パルムウの少女をサポートに二人で潜っている。武器はその時々で変わるらしい。今のレベルは4で、二つ名は炎魔。炎の魔法を使い、魔物を倒すから。一人で闇派閥を数カ所壊滅させた噂がある。

拠点はオラリオ外にあるらしく誰も知らないみたい。

これくらいの情報しかないみたい。剣術の指南を頼むにはダンジョン前で待っているしかないみたい。

教えてもらえるかな…

朝早く、ダンジョン前で彼を待っていた。付き添いにリヴァリアが居てくれる。

少し待っていると彼が来た。側にパルムウの少女がいたのでサポーターの子だろう。そんな彼らに私は近く。そして、

「あの、アイズ・ヴァレンシユタイン、です。」

私に、剣術を教えてください。」

頭をさげて頼んだ。

side out

頭をさげる幼女の前に大人の俺。：事案じゃね？

なんてバカな考えは置いといて、どうすつかな…。返答を考えていると、袖を軽く引つ張られる感覚がした。そちらを見ると連れの少女が心配そうに見上げている。：返答は決まったな。

「頭をあげてくれないかい？」

そう優しくアイズちゃんに言う。頭をあげたので、取り敢えず自己紹介するか。

「改めて初めまして。ジョット・ボンゴレだ。」

「…どうも。」

連れの娘も頭を下げる。そして俺の返事を伝える。

「…すまないが教えることは出来ない。」

断りの返事をする、アイズちゃんはガーンと効果音が聴こえそうな程のショックな顔をする。うっ、罪悪感ががが…。

ハイエルフの美女が近づいて来る。確か、王族の者で、ロキファミリアの幹部の一人。九魔姫の二つ名を持つ、リヴァリア・リヨス・アルーヴ、だったか？

「すまない。同じファミリアの者だ。小さい子どもが頼んでいるのだ。引き受けて貰えないだろうか。」

「何故、俺なんだ。」

「この娘がダンジョンで貴方の剣術を見たそう。それで教わりたかと思っただ。頼まれてくれないか。」

「なら、貴女は突然自分に教えを請うものに教えるのか？それも別のファミリアの者に。」

「それは…。」

「こちらにも都合がある。それに最近俺の周りを調べていたようだな？」

そう、それが不愉快だった。超直感が面倒事の予感を教えてくれたから警戒していたら最大派閥の1つと来た。唯でさえもう1つの方からも何故か狙われているみたいだし。

「というか、今現在も『視られている』し。本当に勘弁してくれ。おっと、思考を戻そう。」

「貴方達はその娘を大切に思うことは別に構わない。だが、こちらの事はどうでも良いような態度は気に入らん。」

「そういう訳では…。」

「こちらからしたらそう感じると言っている。だからその娘には悪いが断らせて貰う。それに貴女は名乗らなかったしな。俺には名乗る価値がないのだろう？」

「…あつ、す、すまない！」

「貴女は有名だ。だが名乗りは礼儀だろうか？…まあ別に良いが、そろそろ行かせて貰おう。行くぞ、『アーデ』。」

「はい！ジヨット様！」

「…ハア、様じゃなくて良いのだがな。では失礼する。」

「…本当にすまない。」

彼女らを置いて、主人公君のヒロインの一人、リルカ・アーデを連れてダンジョンに入った。

まあこの娘のことは見ていらなかったもので、自分の意思で加入したから後悔はしていない。

「けど面倒事はもう来んなあ！」

「…………ポーションって胃痛に効くのかな？」

彼らは行ってしまった。その後、帰りにリヴァリアが謝ってきた。私を心配してしたことなどが裏目？に出たんだって。

：むう。私のためにしたことだから、どう返せば良いのかわからない。：教えて貰いたかったな。

side out

リリルカ・アーデside

リリとジョット様が出会ったのはダンジョンないでした。何時ものように冒険者様に着いて行って魔石を拾う。サポーターと言うだけで見下され、さらにパルムウなので余計に酷い扱いを受けます。それでも生きるために続けていました。そして、着いていった冒険者達に暴力を振るわれます。そんな時にあの方に会いました。

リリに暴力を振るっていた人達をあつという間に倒して、リリを治療してくれました。リリの事情を聞くと、自分の専属サポーターにならないか言ってくださいました。最初は怪しみましたが、すぐに他の人たちと違うとわかりました。半年間一緒に潜って、稼ぎながら鍛えてもらいました。

ある日、同じソーマファミリアの人達に暴力を振るわれたのをジョット様に知られて、ジョット様がソーマファミリアと一緒に着いてこられました。そして、主神のソーマ様と団長と話をすることになりました。

酒倉に入っていたジョット様達をリリは少し離れた場所で待っていました。暫くすると、ジョット様がきて、一緒に着いて来るように言われました。もしやと思いましたが、ジョット様は普段通りだったので神酒の影響がなかったみたいで安心しました。

着いていき、ソーマ様に会うと謝罪と改^{コンバージョン}宗して良いと言われました。驚き、ジョット様を見ると、こちらを優しく見ていました。因みに団長は気絶して地面に転がっていました。

その後、泣きながら抱きついた事は今では少し恥ずかしいですね。でも、同じファミリアになれたので嬉しかったです。

ジョット様が起こすことにはもう慣れましたね。：ハハハ、
ハア。でも、とても楽しく充実していて、リリは幸せです！

side out

いや、超直感に従って向かったら幼女が大の大人に暴力をふるわれているのを目撃したから殴り潰した。

すぐに応急処置をして地上に向かった。え？殴り潰した奴らはどうした？ 知らんな。たぶん蟻のエサにでもなったんじゃない？ 子どもに手をだすクズなど助ける義理はねえな。

治療した後、名前を聞いてヒロインの一人じゃんって気付いたけど、事情聞いてほっとけなかった。専属のサポーターにすることで稼がせられるし、守れるので良かった。始め、警戒されたけどすぐに心を開いてくれた。

一応、自衛が出来るように軽く鍛えてあげた。アーデのスキルも中々便利だよな。

半年ぐらい過ぎたある日、また暴力されているのを見つけた。しかも、同じファミリアときた。自分のファミリアを傷つけやがって、もう我慢ならん。と、アーデを連れてソーマファミリアに向かった。邪魔するものは威圧で気絶させた。：えっ、弱っ。って思ったのは内緒だ。

ソーマ神と団長の何て言ったっけ？ まあ、そいつら見つけてOHA NASHIをした。団長の男は話にならんから大地の炎で重力操作をし、気絶させた。

ソーマ神と賭けをし、神酒ソーマを飲んで平気だったらアーデに謝罪と改宗の許可を出すようにした。まあ平気だったね。：大空の炎を嘗めんな。

で、アーデを俺と同じファミリアに入れて解決。

まあ、こんな感じで一緒に行動している。まあ、これから原作開始まで自衛出来るように鍛えますか。強くて損はないし。

続く：かわからない。

名探偵コナン

ジンに成り代わったんだが義妹達が可愛くてツライ
(仮題)

ウツス。前世一般人、今世殺し屋の俺が通りますよつと。

：現実逃避はここまでにして。

どーも、某真実はいつも1つの世界に出てくる有能なのか無能なのか良く解らん詩ジン、またはドジンに転生しました。

いや、ね？ 何かふつーに死んで、目が覚めたら(意識が戻ったら)小さくなってているし。アレ？アポトキシン飲まされた？なーんてな？ハハハツ(フラグ)。って現実逃避していたら、突然頭に激痛が走ったら今世の情報が甦って？きて、ジンに成り代わったことがわかった。てか、ジンさん人生ハード過ぎない？雪が降る中、捨てられるって…。

因みにロシア人と日本人のハーフみたいツス。

そんな中、ジンさんは拾われた。拾ったのはボスじゃなくて幹部の一人のおっさんな。もう歳で自分の後継人をつくろうと考えていたところ、偶々俺に出会ったみたい。

で、ジンさんそのおっさんから色々学んだみたい。暗殺術から交渉術、様々な分野をね。

それと洗脳紛いなことを受けてたみたいだね。あの方のためにくっついて感じ。まあ、じゃないとあんな忠誠心を持たないか。納得納得。

けど、今は俺とジンさんの意識が融合？したお蔭で解けたみたいだけどね。意識は俺主体だけど知識とか技能とかはジンさんのを受け継いだみたい。そりゃあ肉体がジンさんのだから当たり前か。

で、もう殺しとかしてたみたいね、ジンさん。銃で殺した記憶とか経験したわ。

嫌悪感がしないのはジンさんのお蔭かな？まあ、罪悪感を感じてたみたいだけ。

今の俺っていうかジンさんの立ち位置は幹部候補。もう少しでコードネームを貰えるみたい。：ハイスペック過ぎない？ジンさん。てか、まだ子供なのに幹部候補って……：違う意味で黒ブラックかよ。

あれから数年。正式にコードネームを貰ってジンになりました。

え？時間が跳んだ？いや、男の私生活を語ってナニになるよ。てか血みどろな話なんてしたくないよ。慣れちゃったけどさー、この生活に。胃薬常備してるけど。

あ、表の戸籍は黒澤 陣です。……：ここで公式設定つか。手を抜き過ぎだろ犯罪組織エ。いや、普段からジン呼びされているから戸惑うことはないから良いけどさ。他になかったのかね？

見た目から日本人じゃないって判るでしょ、バカなの？ああ、だから各国から色々浸入されるのか。

ジンさんじゃなく憑依？転生？どっちでも良いや。それをした俺だから無駄に殺していないよ？まあ、現場を見られて隠せそうになかったら仕方なく始末はするけど。依頼されたヤツしか手を出さないよ。そうじゃないと俺が殺されるし。一度死んだからこそ、死の恐怖が解るから。

まあ、だからと言って不老不死とかは嫌だけどね。

話を戻そう。俺の場合、こちら側のヤツは手をだすけど、無実とかそう言ったヤツは信頼できる裏のヤツに頼んで死体とか誤魔化しているけど。：爆破って便利だな！（黒い笑顔）

後、NOCとかは自分のミスで正体バレしたのは始末するよ。自業自得だしね。唯、所属していた組織からの裏切りとか自分じゃない他の要因でバレたヤツは可能な限り助けているよ。：やつぱ隠蔽工作は爆破に限るぜ！（超良い笑顔）

逃がした奴らは悪いけど田舎で農作業して貰っている。家族ごとね？そこら辺も隠蔽しているよ。組織とかにバレないようにね。バレたら俺も死ぬから丁寧にOHANASHIをして納得してもらった。てか、潜入捜査官多過ぎワロタ。組織ガバガバ過ぎんだろ。対処

するこっちの身になれ。

あ、ジンさんの相棒のウオツカも最近部下になったよ。てか引き抜いた。ここら辺は別の機会で話そう。

で、部下になったから色々してやったらなつかれた。

原作の忠犬並くらいに。何故だ、普通に接してただけなのに。まあ別に問題ないけど。

それで、新たなジンさんの任務は……宮野姉妹の監視です。ハイ、あの宮野姉妹です。両親が亡くなって組織の研究所に監禁されているようです。

今度から俺がその任務につくとラムからのお達しです。あの野郎、いつかぶちのめしてやる。

：話を戻そうか。で、研究所に行つて宮野姉妹の様子を確認してぶちギレました。ええ、ぶちギレました。

なんだあの部屋。ろくに物がねえじゃねえか。しかも、まだ子供（他人の事を言えない）なのに痩せちやつているじゃねーか。

そこんところをここの所長的な男に聞いたら、気持ち悪い顔でべらべら喋ってきた。内容はムカツクから省くとして、胸糞悪いからぶん殴った。鼻とかが折れた感触がしたな。地べたを痛みでのたうち回つてたよ。まあ、無視してラムに電話して俺が引き取ることを伝えたら当然文句言ってきたよ。黙らせたけど。

流石、ジンさんボイス。殺気と共に低い声で話したら渋々承諾してくれたよ。定期的に連絡しろつて言われたけど。

宮野姉妹を引き取つて、セーフハウスの1つ（組織に知られていない物）にウオツカと暮らし始めた。始めは警戒されたけど飯とか作つたり一緒に過ごしていると、なつかれた。

志保からお兄ちゃん呼びされた時、意識が跳んだね。俺の妹達が可愛くて生きるのが楽しいです（超良い笑顔

その代わり、ベルモットがグチグチ五月蠅いです。何がヘルエンジェルだ。家の妹は天使だ！^{エンジェル}こんのおくクソアマがあゝ。（ガチギレ

まあ、妹達が可愛くて誰かに話したかったんだよね。何が可愛いかちようどよかったから、小一時間語ってやったぜ。語り終わったら、何かげっそりしてたな。定期的に語ってやるって言ったら勘弁してくださいって言われた。

解せぬ（・ω・）

……こうなったら、ラムの定期連絡で話し足りないことを話そう。何か勘弁してくれって涙声で言ってるけど気のせいだよ。

続く……か、わからない。

設定

ジン

前世で病死したら、ジンに成り代わっていた男。

現在引退した元幹部のおっさんから様々な分野を教わった。体術等万能に扱う。射程？リアルゴルゴ13をできる程。つまりチート。

宮野姉妹を引き取って、溺愛中。今日も妹達が可愛い。普段は一言で済ましているが妹達のエピソードを語る時はそれが見る影もない。その語りのおもな被害者は幹部の者。特にベルモットとラム。